

(別紙)

成果の説明書

水口 剛	経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>テーマ：責任ある投資の研究。</p> <p>平成 24 年度は、「責任ある投資 (Responsible Investment)」を総合的に研究することができた。責任ある投資とは、2006 年に国連が公表した責任投資原則 (Principles for Responsible Investment : PRI) をきっかけに広まった概念であり、年金などの機関投資家が投資を行う際に、環境、社会、コーポレート・ガバナンスの要素を加味していこうというものである。そうすることで市場の短期主義 (ショート・ターミズム) を克服し、市場のメカニズムを通じて持続可能な社会を実現していくことに、この概念の主眼がある。</p> <p>従来、責任ある投資を正当化する論理としては、長期投資、すなわち長い目で見れば環境、社会、コーポレート・ガバナンスに配慮した投資の方が有利であることが挙げられていた。しかし、このような論理は、責任ある投資を経済合理性の枠内で説明しようとするものであり、投資における「責任」の概念を十分説明するものとは言えない。そこで、この分野で最も先進的と思われるノルウェー政府年金基金に着目し、同基金の責任ある投資の基礎となったグレーバー委員会の報告書を検討することで、投資における倫理の側面について考察を深めた。</p> <p>また、責任ある投資は欧米では政府系の基金や公的年金を中心に活発化しているにも関わらず、日本では公的年金の動きが鈍い。その原因は法律上の対応の違いにあると考え、ノルウェー、ニュージーランド、イギリスなどの法制度を参考に、日本の国民年金法、厚生年金保険法などを検討した。</p> <p>これらの検討の成果を 1 年間かけて文章にまとめ、単著の公刊にこぎつけた。水口剛著『責任ある投資』(岩波書店、平成 25 年 4 月 16 日発刊) である。原稿の作成に相当の苦労をしたが、現時点での研究の集大成と言える著書になったと考える。</p> <p>平成 25 年度は、この研究の一層の進展を図りたい。具体的には、学内では國分功一郎准教授らとの「金融の哲学」研究会への参加、学外ではこの分野に強い関心を持つ(株)クレアンとの共同研究を計画している。</p> <p>テーマ：統合報告の研究</p> <p>国際統合報告評議会 (International Integrated Reporting Council : IIRC) が統合報告 (Integrated Reporting) に関する国際フレームワークの草案を作成していることもあり、近年、急速に関心が高まってきた分野である。IIRC に参加している日本公認会計士協会のサステナビリティ情報開示専門部会に委員として加わることで、最新の情報を得て研究することができた。</p> <p>他の研究者が、従来の情報開示論、会計学の延長線上で論じているのに対して、責任ある投資との関係に着目して研究しているところに、独自性があると考えている。その研究成果は、上記の著書『責任ある投資』の中で 1 章を割いて、論述した。</p>	

2 その他の事項

平成 24 年度は、経済学部長の任期の最終年度であり、学部長としての業務に多くの時間を費やした。まず、4 月の入試出題者の決定から始まる入試関連業務では、綿密な校正を行うことで、出題ミスなし、中期日程入試では問題訂正もなしという、安定した業務運営を行うことができた。また、平成 24 年度入試において志願者数が大きく落ち込んだことから、入試課題検討委員会を設置し、県内及び近県の高校訪問などを実施して課題の把握に努めた。結果として、平成 25 年度入試では、志願者数の大幅な伸びが見られた。さらに、秋入学に関する検討も行い、当面、静観するとの結論を得た。

教務関係では、カリキュラム等検討委員会において、初年次教育の大幅見直しを含むカリキュラム改革の検討に着手した。語学の 2 単位化や文章読解に関する必修の少人数クラスの設置など、非常に大きな改革となったが、平成 26 年度からの実施に道筋をつけることができた。これを機に、地域政策学部との科目の相互乗り入れの議論も開始することができた。

そのほか、教授会の運営、大学訪問に来た高校生への経済学部の説明、後援会地方支部総会への出席、公立大学協会商・経・経営部会への出席などを行った。